

左甚五郎 その一

福岡職業能力開発促進センター 和田 正博

1. 左甚五郎 (ひだりじんごろう)



左甚五郎 (ひだり じんごろう, あるいはひだの じんごろう)。江戸時代初期に活躍したとされる、伝説的な大工。彫刻を得意とする職人、江戸時代きっての名工だ。今では、「聞いたことはある気がするが」と、いう人すら減ってきて、「『さじん、ごろう』って誰ですか?」と言う人々の増加が見込まれる。日光東照宮の眠り猫を彫った人だとか、昭和の人だと子供のころ使った彫刻刀の名前になった人といわれて、合点がいく人もいるだろう。

ところが、江戸時代ともなると、左甚五郎を知らない人はいない。「甚五郎がこさえると、木の龍だの、ネズミだの、カニだの、魂ってもんがこもっているから何だって動き出すって話よ」そんな訳はない。が、江戸時代初期、そういう甚五郎の不思議話はあつという間に全国に広まり、姿は知らないが、その名を知らぬものはいなかった。

さらに左甚五郎の話は、全国に広まるうちに尾ひれがたくさんついた。彼の「左」姓の由来も多くの諸説がくっ付いたようだ。

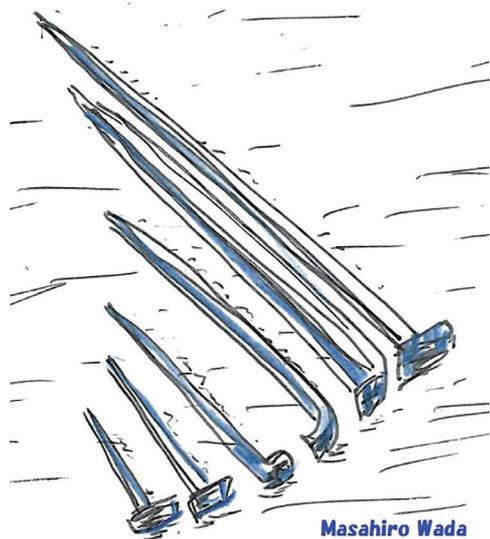
ねたまれて右腕を切り落とされたため左手一本で仕事をしていた。あるいは、サウスポー (左利き) だから左という姓を名乗った、飛騨高山の生まれから、なまって左になったという説、さらにはその仕事の見事さから、「右に出る者はいない」「左を号すべし」と天皇陛下から官位を授かったなど。いずれも粹で謎めいた由来だが、どれが本当の話かはわからないまま、400年以上もたってしまっていて今に至る。

2. 西の番匠 (大工)

徳川家康の三回忌も終わり桜が満開の江戸。その街角に京都伏見を中心に仕事をしている左甚五郎が旅装束で歩いている。ふと、今川橋のあたりで、散った桜の花びらと共に、ノコを引く音や、釘を打つ音が風に乗って聞こえてきた。甚五郎は思わず誘われるように歩みを進めた。見るとある普請場で江戸の大工たちが仕事をしている。

かねてから、江戸の大工の仕事を見てみたいと思っていた甚五郎。どんな仕事をしているのだろうと、食い入るようにその仕事をしばらくじっと見ていた。「ほう」この人の悪いところは、思ったことをそのまま口に出していってしまうところにあるらしい。「かっこうは立派だが、仕事は、こりゃ下手だな。おまけにぞんざいだ。手傷釘こぼし。ははは。こりゃ始末に負えないな。鼻にホクロのある奴はひどいな。鉢巻をしている奴は、何とか手を加えればものになるか」など。

ところが、独り言のはずの声^{こゝろ}が筒抜けに当の大工まで届いてしまった。甚五郎のように騒々しい現場で長年仕事をしている人は自然と声量は増すし、いかにせん、声の質として通りがよくなってくる。



江戸っ子は血気早い。仕事をしてきた若い大工たち。「おうおう」「なんだって、ケチをつける気か」「鼻にホクロは生まれつきでい」「てやんで。」と、わっと大工たちに囲まれ、もみくちゃにされてしまった。そこにたまたまやってきたのが彼らの棟梁・政五郎。あわてて割って入る。「おうおう。仕事をしろとは言いつけたが、ケンカしろとは言っていないぞ」鼻にホクロのある松「棟梁、だって、こいつ『下手でござい』っていいやがるんで」「松、お前うまくはないよな。こちらさん、よくわかってらっしゃるじゃないの。お目が高けえや。なあ」と、みんなを仕事場に戻し、その男の素性を聞くと、「わしは西の番匠^{ばんしやう}（大工）で、名は」というと、言葉をさえぎり棟梁、「おいおい、どっちの肩も持つわけじゃないが、『同職^{どうしやく}をけなす』のは感心しないな」と諷めつつ、遠目で大工たちの腕を見抜いたこの男に、腕の良さを感じた。この棟梁も並ではない。

「でもこうやって出会えたというのも、これも何かの縁だ。今人手が足りねえんだ。行く当てもなかったら、どうだい。うちで草鞋^{わらじ}を脱がないかい」と言葉を継いだ。

その夜は仕事を早じまいして、歓迎の宴。元来、血気盛んだが根はカラッとしている江戸っ子の若い

大工の衆と、これまた竹を割ったような左甚五郎。たたいたこともたたかれたことも酒で洗い流したか、スッカリ忘れてお互いに楽しく盛り上がる。が、ふと、松が気付く。「そういや、あんた名前はなんていうんだい」出合って半日以上たっている。そろってのんきな話だ。

「おう、そうだった。わしは飛騨高山^{ひだたかやま}の生まれで」と話し始めた鼻っ柱で、根っからの江戸っ子の棟梁^{とうりやう}は再びそそっかしい。また話の腰を折ってしまった。「なに。飛騨高山^{ひだたかやま}といえば、あの日本一の大工の左甚五郎先生がお生まれになすったところだ。あんたも大工なら一度はお見かけしたことはあるんじゃないかい」



甚五郎、思わぬ不意打ちを食らって「会うにはあったことはあるが」と言葉を失う。「なに。会ったことがあるのかい」と、身を急に乗り出す棟梁の眼光がさらに鋭い。「会ったどころか、この俺だ」と、名乗りづらくなってしまった。言うに事欠き、己への謙遜^{けんそん}や自戒^{じかい}が混じってしまったか「いやいや、つまらない野郎だよ」と思わず甚五郎。棟梁は心酔^{しんすい}している左甚五郎先生のことを悪く言われたので、一瞬むっとしたが、「ま、お前さんもまだまだ修行が足りてないということだ。で、おめえさん名前はなんていうんだい」

困ったのは甚五郎だ。もう、甚五郎とは名乗れな

い。「忘れてもうたなあ。なんって言ったかな」「おいおい、自分の名前だよ」そこに、間髪入れずトンチのきいた一番年の若い梅「何だいそりゃ。んじゃ『ポン助』っていうのはどうだ」ずいぶんとひどい名前だが、甚五郎も思わず手をたたいて笑いながら「『ポン助』。そりゃいい。『ポン助』に一度なりたいと思っていたところだ」一同その夜一番の大爆笑。とうとう、甚五郎はそのまま『ポン助』になってしまった。

3. 棟梁の道具

その夜、棟梁は一つの道具箱を『ポン助』に渡す。「よかったらこのおもちゃ箱を使ってくんない。江戸では道具箱のことをおもちゃ箱と呼んでいるんだよ」「ありがとう、拝見させていただくよ」と、中を見せてもらうと。この道具たち、刃鋼も柄も上質、しかも棟梁が精魂込めて手入れをしているようで刃先から柄まで良いツヤが光っている。いずれも棟梁の愛着が感じ取れる良い道具たちだ。



道具にはその人の技量がにじみ出る。左甚五郎は思わず「ほう。この人は本当にできるな」と見抜いた。しかし、左甚五郎はさらに上手だった。一見して刃先の手直しが必要なところも見抜く。棟梁に「使い良いようにちょっといじらせてもらうがいいかい」と「もちろんお前さんの好きなように使っておくれ」

棟梁、話だけですでに『ポン助』の腕を信頼して大切な道具に手を入れることを許してしまうから不思議だ。

4. 二枚の板

カラスカァと、夜が明けた。翌朝、棟梁を残し、『ポン助』は皆と一緒に現場に行く。

話だけで腕を見抜く棟梁と違い、二流三流でしかない若い大工衆に『ポン助』の腕を見抜くことはできなかったようだ。新入りの『ポン助』をなめていた。「板でも削っておきな」と松。弟子入りしたばかりの小僧がするような下見板削りを言いつける。が、郷に入っては郷にしたがえ。『ポン助』、「あいよ」と逆らわなかった。が、それならと彼がとった行動は。



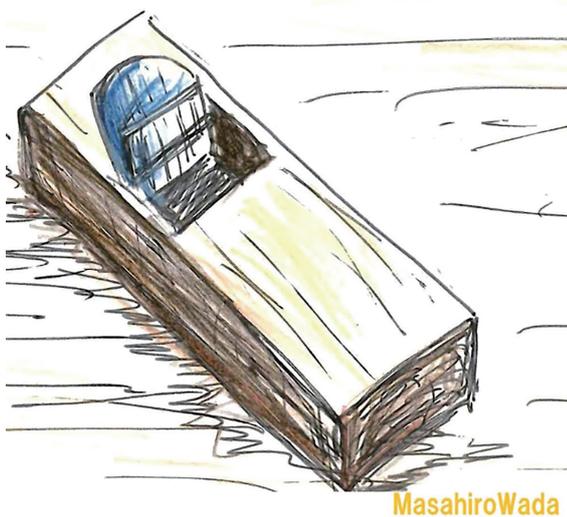
『ポン助』はそこにあった砥石^{といし}を手にして、ため息一つ。「これは、ヘタクソになるわけだ」砥石の修正をおこたっていて、平面が荒れたまま。これではいい刃物は研げず、こんな刃物で製品にいいものができるわけがない。最初に手を付けたのが、砥石の修正だった。その砥石^{といし}の調整を終えると、今度はカンナの刃を研ぎ出す。荒仕子^{あらしこ}、中仕子^{ちゆうしこ}、むら直し^{なむら}、仕上げと4丁のカンナの刃を研ぐのであるが、一心不乱に休みなし、汗もふかずに研いでいる。

できる人が見れば、その大胆かつ繊細な研ぎの姿

を見て、「こいつはただものではない」と、気が付くだろうが、二流三流の若い衆に見抜く眼はまだ備わっていない。逆に「『ポン助』の野郎。なに、カンナ研ぐのに時間をかけてやんだ」「いや、『ポン助』砥石を研いでいますぜ」とあきれ返っている。

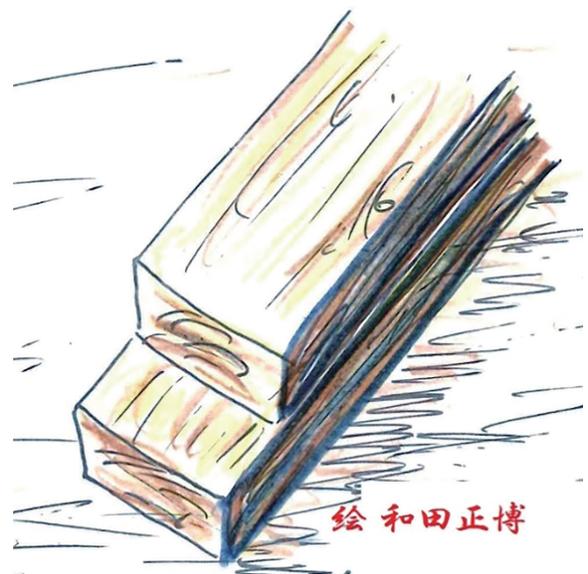
その『ポン助』も内心「荒砥石にいいのがあればもっと早いのだがな。砥石だけはそろえた方が良いのに」と思ったが、今の話ではない。あきらめて時間をかけて研いでいる。「ポン助、くもりにしようぜ」と、松。「いや、タバコは嫌いだ」と、結局、手を一向に休めず、休み返上、半日以上かけて、4丁のカンナを研ぎ終わったかと思うと、今度はカンナの台直し。『ポン助』は指の感覚を頼りに、政五郎のカンナを完全な平面に削る。

ようやくカンナが仕上がると、そこからは早い。こぶだらけの松の板。その山の中からささっと2枚を選び出し、台に置いた。カンナを滑らせると、「すーっ」といい音が鳴る。十分に調整されたカンナは、カンナで板を削るというより、板の方からカンナに吸い付くように削れて行く。仕上げに至っては向こうが透けるほどの薄いカンナ屑くずをだしていた。



『ポン助』はこの2枚の面同士をパンと合わせた。「この二枚、はがしてみいひんか」と、梅にわたした。「ん。妙なことを言いやがる」と思いながらはがそうとすると、板はぴったりと重なり、はがれない。「おーい。あにきー。『ポン助』妙な事したよ」と、

力自慢の松を呼んだ。「なにやってんだよ、お前は」といいつつ「ふん」と力を込めても一向にはがれない。「なんでハガレねえんだ」その様子を見ていた『ポン助』はニヤリと笑う。「力を込めて擦すって熱を加えれば、板がそって、ハガれるかもしれないけど、^{あいだ}間から火が出るかな」『火』という言葉に江戸の人間は敏感びんかんに反応する。あわてて手を放し、「これまた物騒ぶつそうなものこしらえたなあ」と若い大工たち。それにしても、ここまで平滑へいかつに仕上げることができるのはどれほどのことか。



左甚五郎はさりげなく本当に腕の良い仕事とはこういうことだと見せたつもりだったが、残念ながら若い衆には何が何だか分からない。『ポン助』が「左甚五郎」と知っていれば、目を皿ひらのようにして技を盗もうとしただろうが、二流三流は一流ひらうに気付くことができないのだ。変わった手品を披露ひろうされたとしか見ることができなかった。「妙なことをしやがる野郎だな」合わさった板を手に、「どういうカラクリだ」と、首をかしげるばかりの衆。「やれやれ、どいつもこいつも」どっと疲れた。ため息をついて『ポン助』は棟梁の家に帰って、ふて寝してしまった。

驚いた棟梁、帰ってきた松に何があったのかを聞いた。すると、「いやあ、『ポン助』の野郎、ありゃダメですぜ。使えねえ。1枚の板を2枚にするこのご時世じせいにですよ、2枚の板を1枚にしちまうんだから、使えねえや」「なに。ちょっとその板を見せてみろ」

削った板に触った瞬間、棟梁の鳥肌が立った。仕上げ面が見たことがないほど美しい。さらに、手直しされたカンナの刃先をみて、棟梁は『ポン助』が政五郎の想像以上にただならぬ腕前の持ち主だと気が付く。そして腕の高さを見抜けず、学ばなかった弟子に腹が立った。棟梁は松を怒鳴りつけた。「客人に小僧の仕事、板削りをさせたとは生意気だ。てめーには100年早いんだよ」

ただし、さすがの棟梁も『ポン助』がああ左甚五郎だとはまだ気が付かない。

その後も、この『ポン助』現場をみたり、手伝ったり。が、どうも現場には煙たがられる。急ぎの若い衆にとっては時として邪魔に思われた。「おまえの作った踏み台は100年持たんな」言われた梅、目を丸くして「おもしれー奴だなあ『ポン助』。おめえそんなに長生きするつもりかい」と、こんな調子。若い衆は『ポン助』の言葉に聞く耳を持たなかった。

(その二に続く)

【参考】

落語「三井の大黒」；三代目桂三木助
落語「三井の大黒」；六代目三遊亭圓生